

歴史展示との関わり方に関する評価方法の検討

—国立歴史民俗博物館の展示を活用した定量的評価—

松岡葉月* 安達文夫^{†*}

* 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程

[†] 総合研究大学院大学 [†] 国立歴史民俗博物館

あらまし 市民参画を前提とした博物館活動が提言され、展示方法においても、博物館から利用者への一方的な提示ではなく、利用者の視点を踏まえることが重要視されている。しかし博物館において、利用者が展示物から発信される情報をどのように受け取るかについて、その評価方法は確立されていない。本研究は歴史展示を活用する際に、利用者に主体性をもたせ、多様な反応ができる刺激を与えることで、利用者の展示との関わり方を一定の評価指標のもとに評価し定量的に分析した。調査結果から利用者の反応は8通りの型に分類された。この8通りの型のそれぞれを3次元の空間に配置することで、利用者の展示との関わり方を検討した。調査結果から、利用者の展示との関わり方は、色々な場合において固定的であることが明らかとなった。これを定量的な方法で説明できたことから、この評価方法は有効的であると考えられる。

" Examination of an evaluation method about relation with a history exhibition of a user"

—Quantitative evaluation which utilized exhibition of National Museum of Japanese History —

Hatsuki MATSUOKA* Fumio ADACHI^{†*}

*The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies, Doctor Course.

[†]The Graduate University for Advanced Studies [†]National Museum of Japanese History

Abstract Museum activity assuming civic participation in planning is proposed, and, in an exhibition method, that I am based on a viewpoint of a user is regarded as important not the directional presentation from a museum to a user. However, the evaluation method is not established how a user receives information sent to from an exhibit in a museum. When I utilized a history exhibition, this study let a user have independence of will and because various reaction gave the stimulation that it was possible for, I evaluated relation with an exhibition of a user with a constant evaluation index and analyzed it quantitatively. The reaction of a user was classified in eight ways of models by findings. I examined relation one with an exhibition of a user by posting each of these eight ways of models in three-dimensional space. From findings, it became clear that relation with an exhibition of a user was fixed in various ways. It is thought that this evaluation method is effective by having been able to explain this by a quantitative method.

1. はじめに

市民参画を前提とした博物館活動が提言され
[1]、展示方法においても、博物館から利用者への

一方的な提示ではなく、利用者の視点を踏まえることが重要視されている。今後、よりよい展示を作るためには、利用者が、展示物から発信され

る情報をどのように受け取るかということを中心に、利用者の利用特性について検討を進めていく必要がある。

これまでには、展示を作る側の意図がどのように伝わるかという点から、利用者の展示内容の理解度をどう図るかについては研究が成されているが[2]、利用者が展示とどのように関わるか、つまり、展示を作る側の意図が伝わっているか否かではなく、利用者が展示物から発信される情報をどのように受け取るかに関しては評価方法が確立されていない。

利用者の展示からの情報の受け取り方を把握し、利用者に分かりやすい展示方法の改良に反映していくためには、定量的な評価が行えることが望ましい。そこで本研究では、その評価方法として定量的評価を導入する。定量的評価は、色々な博物館の展示において利用者の利用特性を明らかにできる点からも有効であると考えている。

本論文では、読み取り方が多様な歴史展示において、利用者の展示からの情報の受け取り方を評価する方法について、利用者が主体的活動を行える学習プログラムを活用して実施した評価結果について述べるとともに、定量的評価の方法について検討する。

2. 調査の方法

利用者の視点に立ち、利用者が展示物から発信される情報をどのように受け取るかを明らかにするためには、利用者が主体的な活動をしている状況において、展示が発信する情報の受け取り方を調査する必要がある。そのためには、まず、利用者が主体的活動を行える状況の設定をし、主体性を起こす刺激を与えることによって、展示物から発信される情報の受け取り方を見ることができる。

調査では主体的活動を行える状況の設定として、主体的活動を促す刺激となる質問を与えた。主体的活動を促す刺激となる質問は、大別して二種類に分けられ、既成の知識を活用して活動できるものと、既成の概念を壊す意外性のあるものである。前者は利用者が多様な反応ができる質問であり、自分が持っている知識を生かせる質問である。ゆえに利用者の主体性が促せると考え、前者の質問を与えた。教育学によると、学習とは白紙の段階にどんどん書きとめられていく受動的なものでは

なく、既成の知識を活用しながら再構成していく主体的なものであるという考えがある[3]。これは構成主義と呼ばれ、調査では、これらの概念に沿い、利用者の主体性を促すために効果的と判断した既存の学習プログラムを活用した。この学習プログラムは、刺激と反応がセットになっており、与える刺激は、既成の知識、経験や自分のもつ特性を活用して活動できるものである。この刺激から、利用者の展示との関わり方の多様な反応が引き出せると考えられる。次に、この学習プログラムと学習環境の特性を示す。

2.1 学習プログラムと学習環境の特性

(1) 学習プログラムの特性

調査では、国立歴史民俗博物館(以下、歴博)で行なった「わたしの歴博ガイドブック」を作成する学習プログラムを利用した。「わたしの歴博ガイドブック」は、歴博の常設展示を見学して自分が関心をもったテーマを決め、そのテーマに関連する展示を幾つか選択し、日本の歴史や文化を紹介するものである。以下にその項目と構成を示す。

「わたしの歴博ガイドブック」の項目と構成

「わたしの歴博ガイドブック」の項目と構成を図1に示す。ガイドブックは個人の作成ベースに合わせてページ数を増幅することができ、ワークシートの2ページ目から枚数は任意となる。「わたしの歴博ガイドブック」の項目は、a「選んだテーマ」、b「このテーマを選んだ理由」、c「目次」、d「絵か図」(展示に関する絵か図を描くこと)、e「資料の名前～自分で名づけ可」、f「展示の説明」、g「そのほかに調べたこと、考えたこと」、h「あとがき」である。利用者自身の価値観や感性をふんだんに盛り込ませる意図から、d「絵か図」、e「資料の名前～自分で名づけ可」、f「展示の説明」に関しては、展示解説文や展示の模写に留まらず、資料を作った人や使った人の気持ちを考えたり、それらをセリフや詩で表現したりするなどの創造的な表現も奨励するようになっている。

a 選んだテーマ 「 」 b このテーマを選んだ理由 c 目次 p1	(ページ) d 絵か図 e 資料の名前： 時代： 場所： f 説明： p2 ～ (枚数は任意)	g そのほかに調べたこと、考えたこと h あとがき わたしの歴博ガイドブック 「 」 年 月 日初版 著者： 発行： p Last
--	--	--

【図1】わたしの歴博ガイドブックの構成

(2)対象とした展示の特性

学習環境である歴博の展示について、基本方針と展示の手法から整理する[4]。まず展示されている内容は、人々の生活史であり、特定の人物や政治史は扱っていない。人々の生活史はテーマごとに展示され、実物資料に限らず複製品や模型を多く使っている。また、テーマ展示ゆえに、通史展示のように課題相互の関連がたどりにくい特徴もはらんでいる。展示全体の枠組みは、歴史学、考古学、民俗学の3つの学問分野に関する展示が行なわれている。展示手法は、全体として説明型・一方向型の展示で、参加体験的展示はごく僅かである。また、機能展示の手法で、モノ自体が、現存した社会に果たした機能を表象している。つまり展示手法は、モノ資料自体の展示・解説ではなく、モノを生み出した時代背景を示す手法である。

2.2 展示との関わり方の調査方法および分析の方法

(1) 展示との関わり方の調査方法

本研究では、歴博での社会科教員研修に参加した小学校と中学校の教員に、調査の被験者を依頼した[5]。研修会では、「わたしの歴博ガイドブック」が活用され、歴博の常設展示を活用してガイドブックを作成する活動が行なわれた。ガイドブック作成所要時間は、およそ1時間で、一個人あたり、3～5枚の展示紹介のワークシートが作成された。活動後、「わたしの歴博ガイドブック」の

内容についてアンケート調査が行われた。主な質問項目は、歴博への来館回数、ガイドブックの評価(五段階)、内容について良い点と改善点、今後授業に取り入れたいか、などである。

(2) 利用者の展示との関わり方の分析方法

分析には展示資料ごとに作成するd「絵か図」、e「資料の名前～自分で名づけ可」、f「展示の説明」を対象とした。展示との直接的な関わりを分析しやすいことが理由にあげられる。この展示紹介のワークシートにみられる文章や絵図の表現を分析し、利用者の実態から特定の傾向があることを見出だした。ワークシートに記入された展示情報の受け取り方の分析から、利用者の展示の関わり方には6つの要素があり、それらの要素の組み合わせで8つの展示との関わり方の型ができた。そして利用者の反応は、8つのいずれかの型に当てはめられると考えた。

利用者の展示との関わり方の型は、大きくⅠ受動的、Ⅱ能動的な要素に分けられ、さらにそれぞれの中に、A思考的、B情緒的な要素があり、これらの中にa主観的(個人的ナラティブに基づく関わり方)と、b一般的(非個人的ナラティブに基づく関わり方)な要素が見られた。

評価の基準を示すと、Ⅰ受動的、Ⅱ能動的は、展示のキャプションとワークシートに記述された内容を照らし合わせて、ワークシートの記述がキャプションの丸写しの場合はⅠ受動的とし、キャプションの解釈をもとに、展示されている他の資

料や自分の文脈と絡めてワークシートを作成している場合にⅡ能動的とした。また、解説文や、展示されているモノについて歴史的思考や知識による関わりをしている場合にA思考的とし、美術鑑賞のように感性的なアプローチをしている場合にB情緒的とした。さらに展示されているモノについて展示解説文に基づく一般的な解釈が見られる場合にb一般的とし、利用者独自の文化・社会的背景に基づく解釈が加わっている場合にa主観的とした[6]。以上の評価から、展示との関わり方は全部で8通り（ⅠAa, ⅠAb, ⅠBa, ⅠBb, ⅡAa, ⅡAb, ⅡBa, ⅡBb）に分けられ、私の歴博ガイドブック作成において、利用者の展示との関わり方は図2のように類型化された。以下、この8通り（ⅠAa, ⅠAb, ⅠBa, ⅠBb, ⅡAa, ⅡAb, ⅡBa, ⅡBb）を「展示との関わり方の型」と呼ぶことにする。

8つの関わり方の型に見られる結果サンプルと評価例を以下に示す。

（ⅠA b）の事例： 選択資料名「鹿島様」／複製模型

- ・f 展示の説明の記述 「道路が集落に入ろうとする手前に、巨大なわら人形がたてられ、村の外をにらんでいる。危険な人間や邪悪な霊が村に入ってこないようにした。」
- ・評価 「ワークシートの記述には、展示解説文を丸写しした状況が見られる。展示されているモノについて歴史的思考や知識に基づく関わりをしており、展示解説文に基づく一般的な解釈が見られる。」

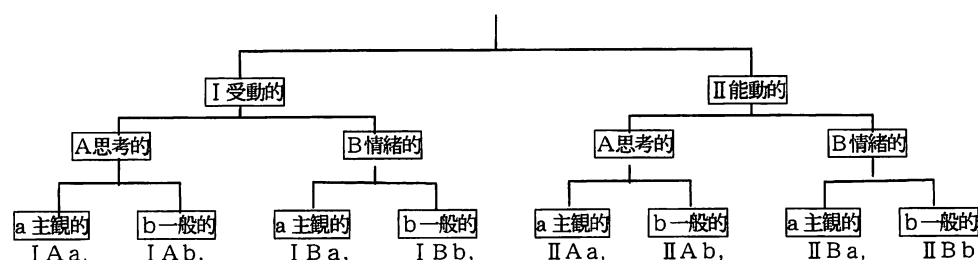
（ⅡB a）の事例： 選択資料名「鹿島様」／複製模型

- ・f 展示の説明の記述 「何に守ってもらうのか。（ワークシートいっぱい鹿島様のスケッチをしている。）」
- ・評価 「展示解説文の解釈は見られず、美術鑑賞のように自分の感性に基づくアプローチをしている。」

（ⅡA a）の事例： 選択資料名「京都西陣の台所」と「同潤会アパートの台所」／複製模型

- ・f 展示の説明の記述 「井戸から水をくみ、かまどの炊事は重労働であったと考えられる。それが昭和に入り、ガス、水道を備えた台所や水洗トイレのある家が、家事労働を軽減させるものとして人々のあこがれであった。」
- ・評価 「ワークシートの記述には、展示解説文の解釈をもとに、自分の解釈が加わっている。展示されているモノについて歴史的思考や知識に基づく関わりをしており、利用者独自の文化・社会的背景に基づく解釈が加わっている。」

f 展示の説明の記述から判断すると、ⅠA bと比較して、ⅡA aとⅡB aは、利用者の文化・社会的な特性を背景に、展示と能動的に関わろうとする態度が見られる。そうした意味で対峙する。また、ⅠA bとⅡA aは歴史的思考からのアプローチに対して、ⅡB aは芸術的な感性からのアプローチである。そうした意味で、これらも対峙した関わり方といえる。結果サンプルで最も多く見られた事例はⅡA aであるが、これと対峙する事例もいくつか見られ、その結果と分析の方法を次章に示す。



【図2】利用者の展示との関わり方

3. 分析の方法と調査結果

3.1 分析の方法

利用者それぞれが、3～5枚のワークシートを作成しているが、個人のワークシートの全てが同じ「展示との関わりの型」の場合は、関わり方が固定的であり、異なる「展示との関わりの型」がいくつか見られる場合は、関わり方に広がりがあると見なせる。このような個人の展示との関わり方については、その傾向を明らかにするために定量的に評価する方法について検討する。

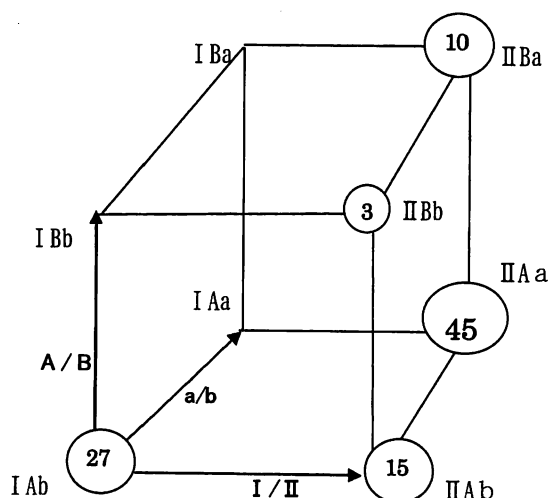
展示との関わり方の要素は、i 受動的／能動的、ii 思考的／情緒的、iii 主観的／一般的である。これらを独立とし、i～iiiを軸とする3次元の空間を構成し、「展示との関わりの型」(I A a, I A b, I B a, I B b, II A a, II A b, II B a, II B b)を、3次元空間のいずれかの点に配置する。I A bを原点とし、II A b, I B b, I A aを、i～iiiを軸とする3次元の空間の原点から単位の長さの点に置かれたと見ると、各点は単位の長さの立方体の頂点のいずれかに配置される。この空間を用いると、展示との関わり方が、どの軸あるいは面上に多く分布しているのか、もしくは、均等に分散しているかどうかを見分けやすい。この空間を用いることで、利用者の展示との関わり方が分かりやすく表せるのであれば、その評価方法は有効であると考えられる。

3.2 展示との関わり方の全体

図3に展示との関わり方の全体を示す。図3より展示との関わり方は、一つの平面に集まり、展示との関わり方に偏りの分布があることが分かる。展示との関わり方は、IIの能動的な関わり方が集まる面に多く、Iの受動的な面は一点だけとなっている。展示の関わり方の要素で能動的な面には、主観的・一般的、思考的・情緒的の要素のすべてが見られる。

展示との関わり方は、能動的な面に多く集まっている実態から、利用者の意識の方向性を分析することができる。この学習プログラムは利用者の主体性を目指すものであるので、まず、受動的な要素が多い「展示との関わりの型」のI A bを意識の出発点をとることができる。次に利用者の意識は、より能動的なII A bに進み、さらに多くはII A aに進む。思考的と情緒的は、能動性とい

う関係において優劣の関係がないので、II A bからII B b、II B aへ進む方向性と、同じくII A bからII A a、II B aに進む方向性が考えられる。これらの意識の方向性から、歴史展示を活用した利用者の関わり方の多くは思考的であるが、能動的な関わりをする利用者には、情緒的な関わり方をする傾向も認められる。



【図3】展示との関わり方の全体の分布
(数値はパーセント)

3.3 個々の人の展示との関わり方

(1) 個々の分布

8つに類型化した「展示との関わりの型」を個々の人についてみると固定的であるように見られる。本節では、個々の人の展示との関わり方を分析し、展示との関わり方の広がり具合を明らかにする。

個人のワークシートの「展示との関わりの型」が全て同じ場合は、空間上の同一の点に配置されて、ばらつきが0であり、異なった点に置かれれば、あるばらつきを有する。この量は3次元空間での分散 v で評価できる。

個々の人の展示との関わり方の広がり具合は、展示の関わり方の要素の各値のベクトルを

$$u_i = (e_1, e_2, e_3).$$

$$e_j = 0 \text{ or } 1.$$

i は作成者の番号

とし、 $\bar{u}$ を u_i の平均、 $u * u$ を内積として、

$$v = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N (u_i - \bar{u}) * (u_i - \bar{u})$$

$$v = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N (u_i - \bar{u}) * (u_i - \bar{u})$$

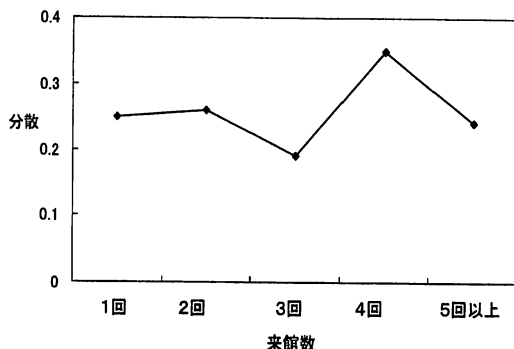
$$= \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N u_i * u_i - \bar{u} * \bar{u}$$

によって求めることができる。

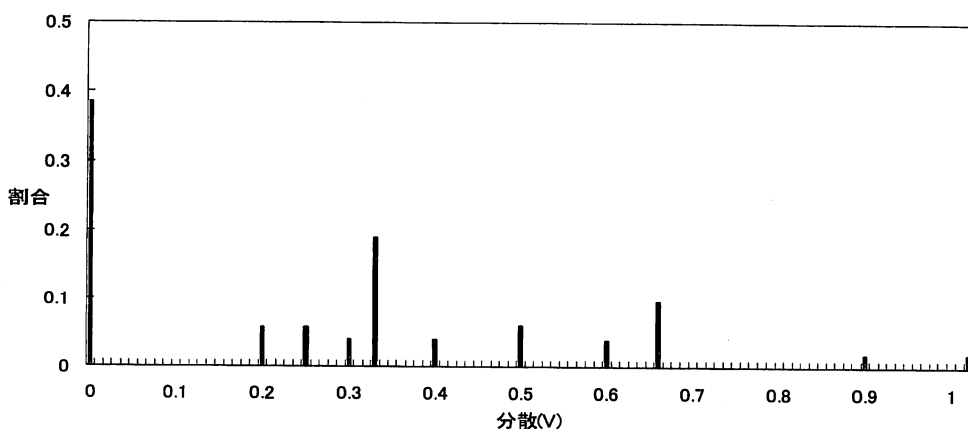
この方法で求めた個々の関わり方の広がり具合を図4に示す。 $v=0$ の時は、展示との関わり方が全て同じであり、 v の値が大きくなると、先に示した関わり方の中で、広がりがあることを示す。 $v=0$ は、全体の40%であるが、これは個人の関わり方の広がり具合が少ないことを意味している。個々の人が作成したワークシートで、「展示との関わりの型」が1個だけ違うものの割合と $v=0$ の割合を合わせると全体の約70%である。さらに、個人の関わり方の分散の平均は、0.26であり、図3に示した全て関わり方の分散は、0.56である。これらの比較から、利用者の展示との関わり方は特定の関わり方に集中し、固定的な傾向があるといえる。これは、自分の得意とする方法で展示と関わる傾向があることを示している。

(2)来館数から見る展示との関わり方

図5は、利用者自身の特性に基づく展示との関わり方と、来館数との関係を示している。全体と比較すると分散に大きな差はない。このことから、利用者自身の特性に基づく展示との関わり方は、来館経験によって広がり具合が大きくなるということが分かる。利用者の展示との関わり方は、来館数に関係なく固定的な傾向があると考えられる。



【図5】来館数と展示の関わり方の広がり



【図4】個々の人と展示の関わり方の広がり分布

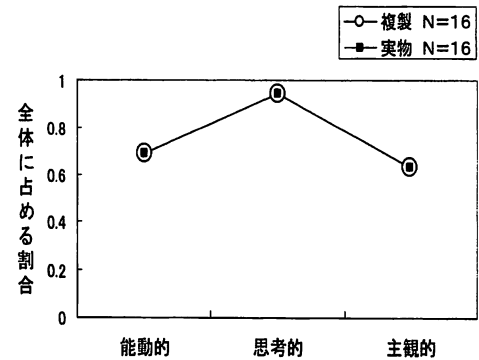
3.4 資料の種類による利用者の関わり方

本節では、資料の種類による利用者の展示の関わり方の傾向を明らかにする。

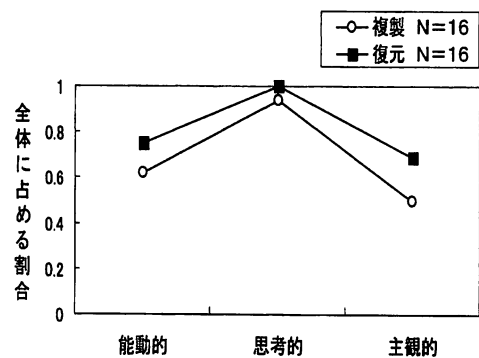
この資料の種類による利用者の関わり方の傾向は、3次元空間上に配置された関わり方を、資料の種類ごとに平均を取り、その要素である（i 受動的・能動的、ii 思考的・情緒的、iii 主観的・一般的）の平均値で見ることができる。資料を見た人による関わり方の違いを避けて、全ての種類の資料に対して同時に比較するためには、全ての種類の資料を見た人を対象に分析する必要がある。しかし、今回の調査は、利用者主体性をもたせる調査の特性から、利用者自由に資料選択をさせたので、選択された資料数と種類にばらつきがあり、全ての種類の資料を見たサンプル数は少ない。このため、最も多く選択されたのは複製資料と、他のii復元、iii実物の組み合わせで資料を選択している利用者について、資料と展示との関わり方を分析した。一個人が同じ種類の資料を二つ以上選んでいるときは、その中から一つをランダムに抽出して比較対象とした。

二種類の資料ごとに利用者の展示の関わり方について、その要素（i 受動的・能動的、ii 思考的・情緒的、iii 主観的・一般的）の平均値を求めると、図6(a)~(c)のようになる。

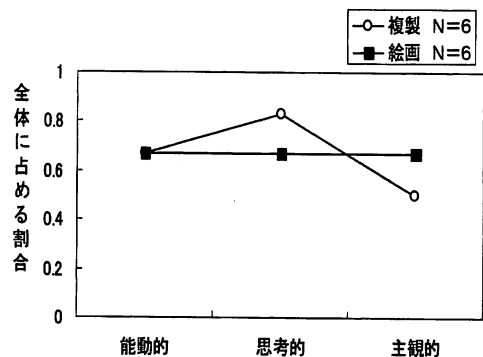
i 複製資料とiv絵画資料、i 複製資料とii復元資料、i 複製資料とiii実物資料それぞれの組み合わせにおいて、関わり方の要素である（i 受動的・能動的、ii 思考的・情緒的、iii 主観的・一般的）の対になる一方の占める割合を示した。調査結果より、i 複製資料とiii実物資料の場合では資料による関わり方の違いは認められないが、i 複製資料とii復元資料、i 複製資料とiv絵画資料の場合だと、資料による違いがあると読み取れる。現時点では、サンプル数が少ないため、今後も調査を重ねて検討する必要がある。



(a) 複製・実物資料



(b) 複製・復元資料



(c) 複製・絵画資料

【図6】資料の種類による利用者の関わり方
(a)(b)(c)

4. まとめ

利用者の展示からの情報の受け取り方を定量的に評価することを目的として、その方法の検討を行い実施した。

読み取り方が多様な歴史展示に対して、利用者の視点からの展示をつくるには、調査において利用者の多様な反応が見られる刺激を与え、利用者の展示との関わり方を明らかにする必要がある。調査では、利用者の主体的活動と多様な反応が予想される刺激を与えた。結果から、利用者の反応は歴史的思考のみならず、芸術的なアプローチなどが見られたこと、展示に関わる態度の部分や思考的部分でも多様な反応が見られたことから、歴史展示の多様な読み取り方を引き出せたと考えられる。

この方法から8通りの「展示との関わり方の型」を引き出すことができ、これらを3次元空間に表すことで、展示との関わり方の全体、個々の人の展示との関わり方、資料の種類による利用者の関わり方を表すことが可能となった。利用者の展示との関わり方は、色々な場合において固定的であることを定量的な方法で説明できたことから、この評価方法は有効であると言える。

今回の調査では、利用者主体の資料選択による調査方法から、資料の数を同一条件に設定して、利用者と資料の関わり方を評価することができなかった。今後、資料のサンプル数を増やすことで資料との関わりを検討していきたい。

学習者が既有的の知識を再構成できるように助けることとしている。(参考：G. E.Hein *Learning in the Museum*, Routledge, 1998)

- (4) 歴博の展示の基本方針と展示の手法は、国立歴史民俗博物館『第三者評価報告書』一展示を中心として一、1995を参照した。
- (5) 佐倉市教員社会科研修／2004年 8月5日(木)、2005年 8月4日(木)に実施。いずれも講師は国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系小島道裕助教授。対象とした教員数は両年度合わせて51名。ワークシートのサンプル数は両年度合わせて193件。
- (6) ナラティブは、通常「語り」と訳されることが多い。本論でいうナラティブとは、L.Vigotsky や J.S.Bruner の社会・文化的アプローチの考え方に基づくものである。よって、本論にある「個人的ナラティブに基づく関わり方」とは、個人の所属する社会や文化で獲得したモノの見方や考え方を通して構築したストーリーに、新しい個々の事象を位置づけることによって意味づけをし、そのストーリーによって、自己の世界観・価値観・倫理観を表現する「語り」である。一方、「非個人的ナラティブに基づく関わり方」とは、個人ならではの「語り」というより、展示解説に基づく一般的な解釈が見られる場合を指す。(参考：J・ブルーナー著／岡本夏木、池上貴美子、岡村佳子訳『教育という文化』岩波書店、2004、J・ブルーナー著、田中一彦訳『可能世界の心理』みすず書房、1998)

参考文献

- (1) 財)日本博物館協会『博物館の望ましい姿—市民と共に作る新時代博物館—』(2003)、日本ミュージアム・マネジメント学会『日本ミュージアム・マネジメント学会特別事業ミュージアム・コミュニケーション—21世紀の博物館を創造する原理を探究する—』(2002)
- (2) 安達文夫、竹内有理、小島道裕、久留島浩「展示の理解の評価に関する検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第130集、pp1-20(2006)
- (3) G. E.Hein の構成主義は、博物館における教育を「能動的学習論」と「構成論的知識論」の組み合わせから考えている。また、それに基づく博物館の役割を、展示や活動を通して